

源重郎世事手控 (一) 罨

野見山悠紀彦

金貸し庄造は、その端正な顔立ちとは裏腹に、凄味を含んだ言葉を口にした。

「貸した金は必ず返して頂きます。どのような事情があるとしてもです。それが世間で生きる者の定まりでございませぬ。期限までに返すと約束をして、それができなければ最早世間から外れた者でございませぬ。外道の者たちは、ただの犬畜生となんら変わりはございませぬ。人と認めるわけには参りませぬ。」

人の情けも慈しみも、みな世間の内にあつての話でございませぬ。その道理も分からず、己が勝手にお情けをと申します。そのような者がどこで野垂れ死にをしようと、私を知ったことではございませぬ」

そもそも庄造との縁ができたのは、源重郎が彼の元へ金

を借りに行ったことから始まる。二年前の八月、妻の妹の嫁ぎ先である久米家から借金を申し込まれた。妻の妹は胸の病を得て、一年も前から伏せていた。姉妹の実家も御家人で、こちらも当主が中風で身動きが取れない。子供のない源重郎を頼ったのは、自然な成り行きであった。

医師の薬代が高額に上ることは重々承知していた。往診を頼めば、一朱二朱で済む話ではない。一年以上ともなれば、軽輩の武士たちは窮地に追い込まれることになる。普段から大人しい妻の菊枝は、口を閉ざして顔を上げようとしなかった。

幾ばくかの蓄えはあつたが、申し込まれた金額には足りなかつた。奉行所内で小耳に挟んだ池の端の庄造を訪ね、頭を下げて借金を申し込む仕業となつた。



庄造の家は板塀に囲まれた古い二階家で、いかにも仕舞屋しむたといった佇まいを見せていた。通りから眺める二階の軒先には、聞いていた目印の瓢箪が風に吹かれてぶら下がっている。金を借りる者は、みなこの瓢箪を目当てにやって来た。

出迎えたのは庄造本人であった。手代は生憎出掛けていると云い、玄関脇の小部屋に通された源重郎に庄造自らが茶を運んで来た。

知合いから小金を借りたことはあっても、未だかつて金貸しから金を借りた覚えはない。何と切り出したものかと、緊張しながら庄造の口が開くのを待った。しかし庄造は視線を落としたまま、黙って茶を啜っている。この家を訪れる目的は、ただひとつしかない。源重郎は沈黙に耐えられず口を開いた。

「金子をお貸し願えると聞き不躰ぶしづけにお訪ね申したが、拝借できるのであろうか？」

「金貸しが生業なりわいでございます。間違まちがいなくお返し頂ければ、どなたにでもお貸し致します」

「いや、誓って期限までにはお返し申す。心配は無用！」
源重郎の声は少し上擦あっている。

「みな様そのように申されます。言葉の通りでございます。すなわち、手前は何の苦勞もございませぬ」

「いかにもその通りでございます。拙者は北町の同心でござる。誓って偽りは申さぬ」

「さようでございましたか。北町のお武家様でいらっしやいますか。ところで幾らお望みでございましょう？」

「五兩程お貸し願いたい」

「承知致しました。ご用意致します」

庄造は余りにもあつさり承諾した。そのため身構えていた緊張が一瞬で解かれ、源重郎は拍子抜けした。思わず庄造の顔をまじまじと見詰めていた。

「私の顔に何か付いておりますか？　こう見えますも長年この稼業を続けております。自ずと信頼できるお方は見分けがつくものです。金を貸すことは人柄に貸すこととでございます。失礼ながら、あなた様にお貸ししても、万に一つの間違まちがいはないと見極めました」

随分買いかぶられたと思つたが、悪い気はしない。しかし、これこそが庄造の計略であつたと気付かされたとき、もはや源重郎の逃げ出す道は閉ざされていた。

口元を緩めた庄造は金を用意するからと、何の躊躇ちゅうじゆもなく立ち上がり奥へ引つ込んだ。源重郎は大きな吐息をそつと漏らし、意外にも早く片付いたことを喜んだ。しかし、庄造の駄目押しはこの後も続いたのだ。

盆の上に金子と証文を載せて戻った庄造は、改まった表情で語り出した。

「五両の利息は月に一分でございます。秋の切米でお返し頂くとして、それまでの二カ月分の利息を二分差し引き、四両二分のお渡しでございます。これで不足はございませんか？」

「いや、それで結構。では有り難く拝借する」
手を伸ばそうとする源重郎を柔く遮った庄造は、

「爪印を押す前によくよくお考え下さい。五両に一分は高利でございます。一分位とお考えになりますと、大層酷い目に遭います。一年払い続けますと、五両に対し三両の利息となります。実に一年で六割の利息を払うことになるのです。このことを肝に命じられ、一刻も早く返済なされますことが肝心なのでございます。爪印を押した瞬間から、重たい責務を負うことになるのです。今一度お考えになつてからでも遅くはございません」

およそ金貸しならぬ言葉を耳にして、源重郎は庄造と云う人間が不思議に思えた。理由もなく、庄造と云う金貸しに興味をそそられた。

この時に借りた五両の金は十月に支給された切米代金で

清算し、約束違わず返済を終えた。しかし、その後も久米家からの無心が続き、半年前に菊枝の妹の死を以ってそれは終わった。その間、幾度となく庄造の許に足を運び金を借りたが、その都度、庄造には練り返し念を押された。完済後は庄造宅を訪れる機会もなくなっていた。

ところが数年を経たこの十一月、庄造の手代が突然に八丁堀の組屋敷を訪ねて来た。口伝えに、庄造が駒形の泥鰌屋でお目に掛かりたいと、源重郎の都合を訊ねて帰って行った。清司と名乗った三十歳程の手代は、用向きの内容を口にしなかった。借金が残っているはずもなく心配はなかったが、金貸しが今さら何の用があるのかと、少し奇妙な感じを抱いた。

そして約束の当日、泥鰌屋の小座敷で二人は向かい合い、豆腐と泥鰌鍋で杯を重ねていた。浅草寺から暮六つの鐘が聞こえて来る。大川を往來する小舟の姿もすっかり闇に溶け込み、舳先の灯りだけがゆらゆらと流れて行く。

庄造は呼び出した用件を切り出すこともなく、頻りに酒を勧めた。そんな中、源重郎が酔いに任せて口にした一言で、庄造の態度が一変した。

「その世界のこととはよく知らぬが、貧乏人から金を取り立てることに引け目を感じないのか？」

この言葉を耳にした庄造は、手にしていた杯を静かに置き、酒で赤らんだ顔を一層紅潮させた。ここから始まって、金を返さない人間は最早人ではないと云う、凄みを帯びた言葉の数々が発せられることになったのだ。

「山根様も世間と同じことを申されますのか？」

何かまずいことを口走ったかと、源重郎は首を傾げた。

「あなた様は、世間とは違ってお考えの持ち主と思っております」

世間の人間とは違っている、そう云う庄造の言葉には頷ける思いもある。しかし、その言葉も後から考えると、庄造の計略の内であったのかも知れないのだ。

源重郎は返す言葉が見当たらず、黙って杯を重ねていた。この四十男の金貸しは、元は幕臣であったと聞いている。幕臣と言ったところで、同心である源重郎と大差ない。五十石以下の御家人で、株を売りその金で金貸しを始めた。

しばらく沈黙が覆った。ご用はないかと廻って来た仲居の声をきっかけに、庄造はやっと用件を切り出した。

「本日わざわざお越し願いましたのは外でもございませぬ。山根様のお力をほんの少しお貸し願いたいです。この商いを致しておりますと、お貸しする判断に迷う方がおられます。十中八、九は分別がつきましても、残る一人に

は迷います。定廻りの同心であられました山根様はお顔が広い。江戸市中の事情に精通されておられます。

ご相談と申しますのは、分別に迷う方の素性をお調べ頂きたいのです。いえ、もう、お分かりになる範囲で宜しいのでございまして、決して無理をなさる必要はございません。諸掛かりは勿論、毎回手間賃を納めさせて頂きます。

山根様が信頼できるお方であることは、これまでのお付き合いでよく存じております。手代の清司は回収に忙しく、そこまでは手が回らないのです。お気に障られましたらお詫びを申しあげますが、何卒お力をお貸し願いたいののでございませぬ」

半年前に定廻り同心から物書同心へ役替えとなった源重郎の懐事情は、考えていた以上に厳しくなった。定廻りは旗本などから付届けがあり、大店や町名主たちから様々な便宜を受ける。大名屋敷への出入りも乞われ、羽織や礼金が支給される。何れも賄賂と云うほどのものではないが、何かにつけて一分、二分と袖の中へ入ってくる。手足となる目明しやその配下の手当てに大半は消えるのだが、貧乏同心の懐はそれによって大いに助けられていた。

庄造の申し出は正直有り難かった。三十年の間、江戸市中を隈なく廻り、街の事情は隔々まで熟知している。庄造の名を明かさないう限り、誰もがお役目と思ひ、あらぬ疑

いを持たれることもない。

源重郎は引き受けることを承知していた。だが庄造の隠された目的は、凡そ口にした事情とは異なっていた。真実を知らされたのは、それから二年も先のことであった。

引き受けたと云つても、大っぴらにはできない。金貸しとつるんでいると知れたら、町衆からは爪弾きにされるだろう。二人が顔を合わせる場面は、極力避ける必要があった。繋ぎのために庄造が用意したのは、南伝馬町を東に折れた具足町の蕎麦屋で、屋号を瓢亭と云つた。八丁堀の組屋敷からは四、五丁と、何かと便利が良い。

奉行所の人間の目に止まっても、場所が蕎麦屋では怪しまれる心配もなかった。店の主人は庄造の遠戚に当たる者で、生活たつきの面倒を見ていると云う。心配は無用と請け合つた。

「お願い致しますときは、軒先に瓢箪を掲げておきます。時折、店先を覗いて頂ければよろしいので」

その上、蕎麦や酒の代は払わなくてよいと付け加えた。調べる内容は、前科の有無・周りの評判・家族の状況といったもので、ごく当り前の身元調べであった。人に知られても咎められるようなものでなく、源重郎は疚やましい気持ちを抱かなくて済んだ。

報告する内容は憶測や感情を排し、事実のみを列挙するように心掛けていた。調べには以前の伝手を頼りにした。顔見知りの目明しやその配下の手を借りたり、大家や町名主に直接尋ねたりした。手段が見つからない場合は同僚を頼つた。日頃から調べを頼まれることはよくあり、みな気軽に引き受ける。但し、ただと云うわけには行かず、幾ばくかの金を滑り込ませた。

月に一両にでもなればと、割合気楽に引き受けた仕事であったが、思いの外多くの手間賃を得て大いに助けられることになった。庄造は気前が良く、月に二両もの金が手元に届けられたのである。

この仕事のことは、妻の菊枝には打ち明けずにいた。時折渡す一両の金に不思議な表情を浮かべたが、定廻りの頃の付き合いが続いていると思つたようだ。

この二年に及ぶ身元調べでは、源重郎の人脈と経験が大いに役立った。馬喰町で鯉節などの乾物を商う、駿河屋長三郎という男の身元調べを頼まれたことがあった。六十歳程の静かな男で、源重郎も見知った商人であった。身のこなしが軽く、手代たちと一緒に立ち働く姿を何度も目していた。商売に熱心な主人で、金に困る事情があるとはとても思えなかったのだが、これが飛んだ食わせ者であったのだ。

古くから親しくしている目明しに、駿河屋の調べを頼んだ。手間賃を弾んだことが功を奏したのか、三日後には報告を受けた。駿河屋長三郎は女房を早く亡くし、子供もいなかった。親戚筋も江戸にはないらしく、商いは十五年前から始め、細りも太りもせず今日までやって来た。急ぎ大金を必要とする事情が見えて来ない。駿河屋は三百両の借金を申し込んでいたのである。

江戸で店を開く前の事情はよく分からないが、どうやら駿府の出身らしい。周りの商人とは付き合ひがないらしく、自ら避けていると思われた。金が何のために必要なのか分からなかったが、特段問題はないと庄造に報告した。

ところが二日後、息を切らして駆け付けた目明しが、驚く事実を口にした。

「旦那へのご報告は済みやしたが、なぜか長三郎のことが気になりやしてね、長年の勤とでも申しますか。それで手下に見張らしておりやしたが、どうも長三郎の動きが怪しいんで」

「怪しい？ どう云う意味だ？」

「へい、昼間は店先で忙しく立ち回っておりやしたが、五つを過ぎると一人で出掛けたそうでやす。後をつけた手下が申しますに、浅草の極楽寺に入ったきり出て来ねえんで、夜通し見張っていたと云いやす。ところが九つの鐘が鳴る

と同時に、七、八人の黒装束が走り出て、上野の方に姿を晦ましたと申します。

今朝になったら、上野山下の呉服屋が賊に襲われたと云うじゃありませんか。もしかしたら駿河屋はその盗賊一味じゃねえかと」

「奉行所には知らせたのか？」

「いえ、旦那にお知らせしてからと」

「わしのは伏せておけ。全てお前の手柄だ」

「へい、有り難う存じます。これから奉行所へまいりやす」金を渡して引き取らせた。藪から蛇ではないが、とんだ奴が飛び出したものだ。源重郎は急ぎ庄造にこれを伝えた。

それから三日後、庄造からは札状に似たものが届けられた。

「危ないところでございました。直ぐにも三百両の金を渡すところでございます。お蔭様で難を逃れました」

役に立つことができたと源重郎は素直に喜んだ。その上、書付けには三両の手間賃が添えられてあったのだ。

駿河屋が庄造に借金を申し込んだ理由は、隣接する文具屋を買って店を広げるためであった。故郷に錦を飾り、駿河にも店を開くのだと熱意を込めて語ったと云う。店を担保に入れることで、庄造も損はないと踏んだ。当初の源重

郎の調べもあり、三百両を渡す直前であった。

後に聞いた話では、長三郎は盗賊一味の頭で、江戸を去る最後のお勤めであったと云う。三百両は店を失う代償に騙し取ろうとしたのであろう。

半年に一度は庄造に呼び出されて、上野浅草辺りで酒食が提供される。そんな変哲もない日々がそれからも続いた。三年目の夏、いつものように大川岸の小さな料理屋で、ぼつりぼつりと取り留めない世間話を交わしていた。その日の庄造は何か蟻むだかまりを抱えているのか、口数が少なく気分が沈んで見えた。

庄造の気持ちに合わせてか、夕刻から降り出した小雨が音もなく川面に注ぎ、生温かな風が僅かにそよぐ。杯を呷あわる様子に、座を切り上げようとした。

「無理をせぬがよい。そろそろお開きとするか」

源重郎が腰を浮かそうとすると、庄造は両手を宙に泳がせて腰を下ろさせた。

「山根様、人間はなんと身勝手な生きものなんですかね。借りるときは諂へつらい、いざ返す段になると居直る。今日こんなことがございましてね」

庄造は下を向いたまま語りだした。

「さるお侍に十両ほど用立ておりましたが、期日が来ま

したので督促に参りました。お侍と云ったって元の私と同じで、無役の御家人です。お返し頂きたいと申しますと、居丈高に、ないと仰有る。ここにある品物は何でも持って行けと怒鳴る始末で、『床の刀は赤鯛だ。何なら奥を連れ行って売り飛ばせ。萎しなびて幾らにもなるまい』などと、辺り構わず喚き散らします。襖の向こうからは、奥方のすすり泣きが聞こえて来ます。

余りにも無責任な言いように私も腹が立ちましてね。何を頂いても構わぬのですね、と念を押ししましたら、武士に二言はないと云い切りました。二言があつたからこそ、こんな修羅場を迎える羽目になったことを全く忘れております。そこで、間違ひございませぬと重ねて念を押し、それではあなた様のお命を頂きますと云つたわけです。そうしたら返答に詰まり、顔を真っ赤にして唸うなつておりました。するといきなり床の赤鯛を引き抜いて、ご自分の腹に突き立てたのです。

死にはしませんでした。後の愁嘆場は酷いもので、ご想像にお任せ致します。こんなわけで、この庄造も聊か減入へいつております」

源重郎は何故か庄造の憎にくみ気る様子が可笑しく、軽く声を出して笑った。

「可笑しいのですか？」

「いや、すまぬ。普段のお主には似合わぬ弱音を聞いた。よくお主が口にする、金を返さぬ人でなしは野垂れ死にしても構わぬのではないか？ 何度も聞いた憶えがある」

「ええ、貧乏侍の一人や二人、どうなつても知つたことではありませんが、貸した金を取り戻せなかつたことが口惜しいのです」

「なに？ 自刃させたことを悔いているのではないのか？」

「当たり前です！ この庄造、さほど柔にはできておりませぬ。十両と引き替えにされたことが悔しいのです。いわば勝負に負けたも同然でございましょう」

「なるほど、そのような考えもあるのか……」

凡そ思いもつかぬ返答を耳にして、源重郎は改めて庄造と云う人間に興味をそそられた。

「申し上げておきますが、手前は決して吝嗇けちではありませぬ。吝嗇な奴らは、人間らしさを半分しか持つておりません。吝嗇な輩は己の金を使わず、どこかで人の金に頼つて生きております。己の利ばかりを考え、人のために金を使おうとしない。いわば借金をして暮らし、一向に返そうとしない奴らと同じではございせんか？」

源重郎は庄造の語る理に甚だ感心した。庄造においては金に向かう姿勢にぶれがなく、常に一貫している。庄造か

ら吝嗇と云う印象を受けたことはない。この日の別れ際にも、盆の支払いにと二両の金を渡された。

庄造にとつての金貸業は、生活たつきの手段であることは勿論、世間を覗く窓口であるのかも知れない。そんな庄造の目に自分はどうか映つているのかと、揺れる駕籠の中で考え続けていた。

その年の、師走の声も聞こえて来そうな霜月の二十日、いつもとは趣が異なる調べを依頼された。日を限つた調べではなく、ある男を捜して欲しいと深刻な表情で頼まれた。六十歳以上の老人で右頬下に二寸程の傷があり、生まれは駿河の吉原宿で名は分らないと云つた。

源重郎の問いに対し、庄造はその訳を語ろうとしない。目を閉じたまま、曲げてお願いを致しますと深く頭を下げた。余程の事情があると思えて、当座の掛かりにと二十両の大金を差し出し、必要なら幾らでも用意すると口にしたのだ。

どうやら金に関わる相手ではなさそうだ。踏み倒された金を、取り戻そうとして見るようにも見えない。名が分からないと云うのもおかしな話だが、年の瀬を間近に控えた今、なぜ急に依頼をして来たのか解せない。

すつきりしないまま引き受けてしまったが、それには歳

末に迫る支払いが大きく関与していた。疚やましい事情があるわけではないが、目の前の二十両には抗しがたい力が秘められていた。

急ぐ人捜しではないと考え、顔見知りの目明し・町名主・興業主などに、折を見ては依頼していた。但し、旗本・大名・寺社の塀の内は、町方は手出しができない。その方面は、口入れ屋などを頼ることになった。これまでの調子で無理をしないで良からうと、左程気に留めないでいた。

だがその思いに反し、庄造はひと月も経ぬ内に問い合わせて来た。源重郎は戸惑った。何を急いでいるのだ？ 急ぐ訳があるのかと逆に問い掛けたが、その理由は語らない。金は幾らでも用意するゆえ一層のご尽力を願いたいと、その声は真剣さを帯びていた。

急かされても打つ手は限られている。要求を無視することも考えたが、既に源重郎は多額の金を受け取っていた。大通りの店々が歳末の大掃除を始める中、空っ風を避けながら依頼先を当たっても、みな心ここにあらずと芳しい返答は返って来なかった。

手を尽くしたと思いがちながらも、ただ一つ残る手段について考えていた。仲間の同心たちには声を掛けていなかった。依頼の理由を問われることを恐れたからだ。まさか金貸しからの依頼とは云えない。

手段に行き詰まった源重郎は、依頼者を大名筋と偽って密かに声を掛けて回った。捜し出せば相応の謝礼がなされると、ひと言付け加えることも忘れなかった。

貧乏同心にとつて謝礼のひと言は、どれほどの効き目を齎すのか、源重郎自身が誰よりも承知している。大店・旗本・大名などからの調べの依頼は日常茶飯のことであり、どの同心も依頼者を詮索しようとはしない。大名の依頼ともなると、その謝礼は高額になることは周知の事実であった。

効果はあった。次々にそれらしい人物が報告された。だが仔細に当たつて見ると、要件を満たす人物とは違っていた。この手も限界かと諦めかけたとき、隠密廻りの同心から興味深い話が持ち込まれた。長年隠密廻りの職にある五十過ぎの同心は、いつも世間の裏事情に目を光らせ、闇に蠢く連中どもと繋がりを持っていた。

目黒不動尊の北へ五丁、雑木林を背に常明寺と云う真言宗の寺がある。その賭場を仕切る権三の下で、墓守をしている寺男がそれらしいと、書き殴った人相書を取り出して見せた。確かに右頬下に大きな爛ただれた傷が描かれている。歳も六十過ぎの老人で、言葉に駿河の訛が窺えると云った。この同心は隠居を間近に控えていた。まとまった金を手にしたかったのであろう。語る言葉に熱がこもっていた。